

リーディング公演『復活』

文化庁文化芸術活動の充実支援事業 ARTS for the future! 採択事業

【あらすじ】

「経読（きょうよみ）」は隠退を決め込み、自分の孤独の塔に閉じこもって日がな本を読む生活を送っていた。

そんな彼だけの静かな城に、15年ぶりの旧知が訪れる。

その夜散々飲み散らかしたこの知人「夕星（ゆうずつ）」は、翌朝になってやっと15年ぶりの訪問の用向きについて話し始めた。

彼らはただの友人ではなく、その正体は…

【脚本・作曲】 高橋悠之輔

【出演】

経読 青山郁彦
夕星 高橋悠之輔
老術師 木下出
ピアノ 花房伸江

【スタッフ】

Jum Design Works (収録)
迫田大樹 (クリエイティヴ撮影)
Creative Pot Tokyo

【制作協力】 AKASAKA ダイニング

【主催】 Creative Garden "Core"

Creative Garden "Core"

Creative Garden "Core" は 2021 年に、設立された任意団体です。
作曲家、歌手、俳優、文学者、文芸批評家、フォトグラファーなどで構成され、本年度から公演活動を行っています。

本年 7 月には、光が丘美術館のギャラリー空間でソプラノ・二胡・ピアノのトリオコンサートを主催しました。



本年度は 12 月 17 日に OAG ホールにてモノ・オペラ/オペレッタの二本立ての舞台公演を行います。



←詳細情報

QR を読み込んでください。

リーディング公演『復活』に寄せて

その対話に結論はない。そこで交わされる議論は巷に溢れる言説である。方向性も発展性もないまま、果てしなく続く。それは議論のための議論、出口は見えない。

ドーナツを食べれば、それ足らしめているその形状の完全性が失われる。だから、ドーナツを食べる行為はドーナツを食べることにならない。このドーナツの概念と個物の関係をめぐるパラドックスはその一例である。「ごはん論法」がはびこる今において形而上学的論議も政治家の不誠実な言い逃れに墮する。

対話の内容は空疎で不毛、生きた意味を見出せない。しかし、そもそもその言説自体すでに死んでいる。次々に繰り出されるそれぞれの言説が巷で本来のコンテクストを無視して恣意的に濫用され、命を奪われる。言説の死体がこの果たしなき議論の中で積み重なっていく。

言葉は、行動が感情を共有させるのに対し、理解を共有させられる。だが、死んだ言説にそのような力はない。理解を分かち合えないのだから、行動も促さない。複数がいっても、そこは共の空間ではない。

けれども、この対話は死を弄ぶ戯れではない。言説を葬る喪の儀礼である。使い捨てされた言説を議論を通じて文化的死へとする葬儀だ。

しかし、それが再生をもたらす。葬儀は共の場であり、思い出を語り合う。この儀礼により死んだ言説は思い起こされる。記憶の中でそれはコンテクストが見出され、言葉として再生していく。

かくして言葉は復活する。そこに出口が現われ、希望がある。

袋小路に入りこみ出口が見つからない。閉じられた世界の中で、出口を探し求めることが実存になる。出口 (Exit)= 実存 (Existence) である。それは対話を通じて共の空間を形成した時に見出される。これは一つの出口主義 (Exitentiakism) の試みである。

<了>

佐藤清文 (文芸批評家)



日本の文芸批評家。ローマ字表記は Seibun Satow。岩手県北上市出身。国際基督教大学教養学部教育学科卒業、同大学院教育学研究科修了。

【主な著書】

まだ見ぬ田中康夫のために『文藝別冊 田中康夫』
河出書房新社、2001 年
同時代的時点—小林多喜二の『蟹工船』
『北の文学』第 57 号、岩手日報社、2008 年
文芸批評家石橋湛山』
BookSpace、2017 年